

# 韓国人日本語学習者の日本語談話における 談話展開方法の特徴

談話展開方法研究から日本語教育への応用及び実践へ向けて

田中 香織\*

(e-mail : kori.chuman@gmail.com)

---

## 目次

---

- 1.はじめに
  - 2.研究目的
  - 3.先行研究の概念と問題点
  - 4.研究方法
  - 5.分析及び考察
  - 6.結果
  - 7.おわりに
- 
- 

## 1. はじめに

自然談話を資料とした研究は、エスノメソドロジー(社会学)に依って発展してきた。そしてエスノメソドロジストと呼ばれる社会学者の一派は、膨大な言語データから人々の日常的な会話を分析し、一見無秩序であるように思われる日常会話の中にも構造があることを明らかにした。現在では社会言語学をはじめとし、日本

---

\* 南ソウル大学 日本語学 専任講師

語学、コミュニケーション学、日本語教育学などさまざまな研究分野で自然談話を資料とした學際的研究がなされている。その中でも社会言語学や日本語学で採り上げられてきた談話展開方法に関する研究は、昨今では日本語教育学分野への応用を視野に入れた研究もなされており、今後の研究が期待されるものである。

## 2. 研究目的

近年、談話に関する研究は、社会言語学を始めとする様々な研究分野で盛んに行われつつあり、日本語教育分野においても注目されている。しかしながら、それらの研究結果が実用的に反映されている例は少ないようである。

昨今のメディアの発達により、海外に居ながらも日本語学習者が生の日本語に触れる機会が増えつつある。日本語学習者が日本や日本語に興味を持ったきっかけも、J-popであったり、ドラマであったり、アニメであったり、中には日本のお笑いを見てなど、理由は様々であるが、教科書(テキスト)の中の日本語ではなく、メディアを通じたものであることが多い。このように、生の日本語に触れる機会が多くなった日本語学習者は、流行語や若者ことばなどにも興味を持ち始めているようであるが、日本語学習用のテキストには自然談話を用いたものは少なく、学習者のニーズに合わせた教材の開発が必要であると考えられる。

そこで本稿の目的としては、韓国人日本語学習者(大学生)の自然談話を分析することにより、その特徴を明らかにするとともに、アンケート調査なども実施し、学習者本人の学習言語である日本語に対する認識なども明らかにしていくこととする。さらにその結果から、談話展開方法を日本語教育へ導入するための可能性について示していくこととする。

## 3. 先行研究の概念と問題点

談話展開に関する代表的な研究として、東京方言の談話展開の方法を解明し、関西方言との対照によって談話展開の方法に地域性があることを認めた久木田恵(1990)がある。久木田は、関西の人からみた東京方言は「ストレートに物を言う、き

つい表現」と評され、逆に東京の人からみた**関西**方言は「回りくどくて言いたいことがはっきりしない」と感じられるという問題を提起し、談話の展開方法の違いに着目し分析を行っている。分析・考察の結果、東京方言が「話し手が自己の主張を露にして聞き手を納得させる方向に展開する**主観直情型(東京型)**」をとるの**対して**、**関西**方言は「順接の**接続詞**によってひたすら**状況**を詳しく**説明**して聞かせる**客観説明累加型(関西型)**」をとることを指摘している。

さらに、この久木田(1990)の研究を土台に談話展開方法を**発展・応用**させた研究として、晋萍(2002)、田中香織(2005)(2006)などがある。

晋萍(2002)では、久木田(1990)の研究を基に、談話展開の方法を日本語教育に取り入れるための試みを行っている。晋は、**中国の大学**における日本語教育の現状として「日本語の自然談話についての指導が行われていないため、**大学卒業後、実際に日本語社会**に入り、日本人の談話をよく聞き取れず、コミュニケーションがうまくできないという問題がよく起こる」ということを指摘し、その解決策として談話教育の本格的導入を提案、日本語自然談話を用いた日本語学習者用の**実践的・分析的談話教材**の作成を試みている。

また、晋(2002)が述べている「日本語**既習者**が**実際の日本語社会**に入った時に起こるコミュニケーションがうまくできない」という問題は、日本語教育分野のみの問題ではなく、**コミュニケーション学**分野にも深く**関係**があると考えられる。久木田の研究においても、**関西人**が**東京人**に、**東京人**が**関西人**に感じる話し方の印象は「きつい」とか「回りくどい」というもので、**ネガティブ**な面が表出している。ここから、**日本国内**であっても、**西と東**という異なった文化的背景を持つ者同士がコミュニケーションを行う際には、誤解が生じる可能性が示唆される。田中(2005)においても、**日本での滞在年数**が長い日本語非母語話者の日本語使用時における談話展開パターンは久木田(1990)の指摘した「**東京型(主観直情型)**」に類似しているため、久木田が「自己主張で話者のペースになりがちな東京方言をきついと感じる」と観察しているように、**日本での滞在年数**が長い話者の談話が聞き手に**ネガティブ**な印象を与える可能性を指摘している。さらに田中(2006)では、日本語非母語話者の日本語談話から見る日本語教育の問題点を談話展開方法研究の視点から分析・考察し、そのまとめとして、久木田(1990)においては異なった談話展開方法を有する者同士の**会話**においては談話展開方法の違いが**違和感**を**覚え**させる原因になっていると考えられているが、**共通のコンテクスト**が少ない場合には、誤解を回避する

為にも意図的に客観説明累加型を用いる事が望ましいとしている。外国語教育においては、文化の違いや言語構造の違いから誤解を生ずることが少なからず起こる。そのような誤解を回避し円滑なコミュニケーションを行うためにも、日本語教育への談話展開方法の導入が期待される。

## 4. 研究方法

### 4.1 予備調査(談話展開方法分析とフォローアップ・アンケート)

筆者担当授業科目、中級日本語会話受講学生(2008年度)の中から2名(男女各1名)の会話発表、レポート、インタビューテストを資料とし、分析・考察を試みる(なお、上記3資料は同一内容会話である)。また、会話資料およびインタビューはビデオを用いて録画、文字化し、一文一文に区切った上で、内容、キーワードなどを検討、分析表によって分析・考察の対象とした。さらに参考として、フォローアップ・アンケートを実施した。アンケートは、2種類のモデル談話(客観説明累加型/主観直情型)を用意し、どちらかといえばどちらかが日本語を話す時の自分の話し方に近いかを答えてもらう形式を採った。

#### 4.1.1 資料について

資料1(音声資料)

録画日:2008年3月20日(木) 録画場所:南ソウル大学内 教室  
形式:発表形式 / レジユメの有無:有

資料2(文字資料)

レポート(録画した発表に関するもの) 提出日:2008年4月10日(木)

資料3(音声資料)

録画日:2008年5月1日(木) 録画場所:南ソウル大学内 研究室  
形式:インタビュー(1対1) / レジユメの有無:無

#### 4.1.2 話者について

話者	性別	生年	出身	居住歴	日本語学習歴
A	男	1979	全州	0歳~7歳:全州/7歳~10歳:ソウル/10歳~11歳:江原道/11歳~25歳:ウイジョンブ/25歳~29歳:東京(日本)/29歳~:ウイジョンブ	26歳:日本語学校(日本:日本人)/27歳~28歳:東京デザイナー専門学校(日本:日本人)/29歳~30歳:南ソウル大学日本語科(天安/韓国:韓国人+日本人)
B	女	1988	釜山	0歳~19歳:慶南・梁山市/19歳~安市	16歳~18歳:日本語学院(韓国:韓国人+日本人)/17歳~19歳:高校(韓国:韓国人)/19歳~20歳:南ソウル大学日本語科(天安/韓国:韓国人+日本人)

#### 4.2 韓国人日本語学習者(大学生)の談話展開方法分析

筆者担当授業科目、中級日本語会話受講学生(2008年度前期)の中から「4.1予備調査」と同じ方法で5名の会話発表、レポート、インタビューテストを資料として、分析に用いることとする(なお、3つの資料は同一内容会話である)。会話発表およびインタビューは、ビデオを用いて録画、文字化し、一文一文に区切った上で、内容、キーワード等を検討、分析表によって分析・考察を試みる。

##### 4.2.1 資料について

###### 資料1(音声会話資料)

録画日:2008年3月14日(木)、3月15日(金)、3月21日(木)、3月29日(金)録画場所:南ソウル大学内 教室 / 形式:発表形式 / レジユメの有無:有

###### 資料2(文字資料)

レポート(録画した発表(資料1)に関するもの)  
提出日:2008年4月10日(木)、4月11日(金)

###### 資料3(音声会話資料)

録画日:2008年5月1日(木)、5月2日(金)

録画場所:南ソウル大学内 個人研究室

形式:インタビュー形式(1対1) / レジユメの有無:無

#### 4.2.2 話者について

話者	性別	生年月	出身	居住歴	学習歴(JLPT)/ 留学経験
AA	女	88・9	富川市(父・母:大田市)	富川市	1年(2級)/短期研修(3ヶ月)
AB	女	89・1	ソウル(父:清州・母:ソウル)	ソウル	3年(2級)/無
AC	女	88・9	ソウル(父:ギムチョン・母:ソウル)	ソウル	3年( 級)/無
AD	女	89・1	ソウル(父:カジン・母:ダソヤ)	ソウル	2年(2級)/無
AE	女	88・6	テグ(父:テグ・母:キョンアク)	ソウル/ソウル	2年(3級)/無

#### 4.3 韓国人日本語学習者(大学生)の日本語談話展開方法に対する認識

従来の談話研究、特に日本語教育への応用が考えられる談話展開方法に関する先行研究を参考に、日本語学習者(南ソウル大学日本語科の学生)15名(内、女子8名、男子7名)+16名(内、女子14名、男子2名)の計31名へ、モデル談話を使用した質問紙によるアンケートを実施、日本語学習者の認識を調査する。

アンケート協力者はいずれも中級レベル(JLPT2級程度)から中級レベル以上の学習者を対象とした。

##### 4.3.1 アンケート方法に関して

先行研究において明らかにされている「客観説明累加型(関西型)」と「主観直情型(東京型)」の特徴を捉えた、内容が同一で共通語使用のモデル談話を作成し、自分の談話展開方法がどちらにより近いかを答えてもらい、その理由を自由回答形式で求めた。その他の質問としては、地域差を見るために、出身地及び言語形成期に過ごした地域の回答を求めた。

なお、アンケートを行う際に、口頭で研究の目的及びデータの取り扱いについて、プライバシーは厳守することを述べた。

##### 4.3.2 アンケートについて

実施日:1回目 2009年 3月 / 2回目 2010年 3月

実施場所:南ソウル大学 人文社会学部4階 日本語科教室

対象:中級日本語会話クラスの学生 / 形式:アンケート形式

#### 4.3.3 アンケート協力者について

2009年度アンケート調査の協力者は、ソウル特別市出身者が9名、京畿道出身者が5名、その他2名の計16名であった。16名の内、言語形成期(3-13歳)の半分以上をソウル特別市で過ごした者が9名、京畿道で過ごした者が5名、その他が2名であった。

また2010年度アンケート調査では、15名から有効な回答を得ることができた。アンケート協力者は、ソウル特別市出身者が7名、京畿道出身者が4名、その他4名の計15名であった。15名の内、言語形成期(3-13歳)の半分以上をソウル特別市で過ごした者が5名、京畿道で過ごした者が8名、その他が2名であった。

#### 4.4 韓国人日本語学習者(大学生)の談話展開方法分析(個人的経験物語)

実用日本語会話受講学生の中から男女計10名の会話発表を資料として用いることとする。会話発表資料はビデオを用いて録画したものを文字化し、一文一文に区切った上で、内容、キーワード等を検討、分析表によって分析・考察を試みる。

さらに、事前に行ったモデル談話を使用した質問紙によるアンケート調査も、分析の対象とする。

##### 4.4.1 資料について

会話資料(個人的経験物語)

日時:2010年4月20日・22日 14:00~

場所:南ソウル大学 日本語科教室 / 方法:ビデオ録画

話題:好きな話題 / 場面:くつろぎ場面(友人とくつろいで話すシーンを想定)

アンケート資料

日時:2010年3月23日・25日 14:00~

場所:南ソウル大学 日本語科教室 / 方法:質問紙によるアンケート調査

## 4.4.2 協力者について

No.	協力者	性別	生年月	出身	言語形成期	学習歴(JLPT)/留学経験
1	K・Y	女	89.5	アンサン	テグ	3年(—)無
2	K・D	男	87.1	チョナン	チョナン	4年(—/2009,1級×)無
3	K・J	女	89.3	ソウル	ソウル→インチョン→ソウル	3年(3級/2006)無
4	M・S	女	89.3	ソウル	ソウル	3年(3級/2008)大阪4日
5	A・J	女	84.8	ソウル	キョンサント→ キョンキト→ソウル	7年(2級)横浜10カ月
6	Y・J	男	85.11	インチョン	インチョン	4年(—)無
7	H・U	男	87.1	インチョン	キョンギド	4年(1級)東京1年
8	K・J	男	89.2	ソウル	ソウル	5年(2級)東京1カ月
9	M・J	女	89.4	ソウル	ソウル	4年(2級)香川1カ月
10	I・H	男	88.7	ソンナム	ソンナム	2年(—)広島6カ月

\*No.8~10:本稿「4.3.3」2010年度アンケート協力者(No.8:BQ / No.9:BU /No.10: BT)

以上、本稿においては4つの枠組みから分析を試みるが、その流れとしては、まず4.1の予備調査として、男女各1名、計2名の韓国人日本語学習者(大学生)の談話展開方法を分析し、韓国人日本語学習者(大学生)の談話展開方法における特徴についての目処を付ける。この2名に関してはフォローアップインタビューも行い、今後の日本語学習者における談話展開方法分析の参考とする。

## 5. 分析及び考察

### 5.1 分析及び考察

「4.1 予備調査」及び「4.2 韓国人日本語学習者の談話展開方法分析」

資料の分析・考察は、資料2(文字資料)→資料1(音声資料)→資料3(音声資料)の順で

行うこととする。

### 5.1.1 「4.1 予備調査」

自己紹介に関して、3種類の資料を分析表によって分析した結果、同一の内容であってもそれぞれに異なる特徴を有することが明らかになった。ただし、ここでは分析表ではなく、文字化資料を提示し、考察結果を示すこととする。

話者A:自己紹介

話者Aにおいては、レジюме無のインタビュー形式の談話(資料3)においてもっともフィラー(あの一、え一等)が多く見受けられた。キーワードとなる接続詞に関しては、レジюме有の発表形式談話(資料1)で順接の接続詞とされる「で」が3回、インタビュー形式談話においても順接の接続詞とされる「で」が2回のみで、逆接の接続詞は見受けられなかった。以上の点から、順接の接続詞を用いて話題を累加する「客観説明累加型」である可能性が示唆された。また、レポート(資料2)に関しては、接続詞が用いられずに話が累加されていくという特徴が現れた。

資料2(文字資料:レポート)

1.私のなまえはoooといます。2.00がくせきのふくがくせいで、今回2年生に  
3.ふくがくしました4.今、住んでいる所は学校からあるいて10分ぐらいにある5.ハクサチョンという所なんですが じもとはウイジョンブです。6.そういうわけで私はブデチゲが大好きです。7.家族は4人です。8.趣味は 写真とることなので9.写真がとりたいときは かるく声かけてください。

\*レポート通りに入力

資料1(音声資料:発表)

1.おはようございます。2.私の名前はoooといます。3.00学籍の復学生で、今回2年生に復学しました。4.で、今住んでいる所は、ハクサチョンっていう所なんですが、

ほとんど あのー じぶんはウジョンブです。5.で、そういうわけで、あの、ブデチゲが大好きです。6.で、家族の構成は父と母と弟と私です。7.趣味は、カメラをつかって写真を撮る事なんです、写真が撮りたい時は、あの、8.軽く声をかけて下さい。9.はい、それじゃ、よろしくお願ひします。

### 資料3(音声資料:インタビュー)

1.自己紹介ですか?2.私の名前はoooと申します。3.で、今年復学した復学生ですが、あの…、も、長い間(笑い)日本のいたので、ちょっとその韓国の大学の生活は、まだ慣れてにと思ひます。4.で、名前は…、あー、名前じゃなくて、あのー、そのー、えー…5.年はですねえ、30歳で(笑い)6.家族、家族の構成は、父と母と弟とあたしです。7.えー、趣味はですねえ、映画を見るのが好きです。8.っと…、ま、いろいろあるんですが、料理とかスポーツとか…はい。9.そのなかでですねえ、う～ん、映画を見る事が結構好きですね。

\*下線部は、キーワードとなる語(フィラー、談話標識(接統詞、接統助詞)等)

### 話者B:自己紹介

話者Bにおいては、レジメ有の発表形式の談話においてもっともフィラー(えっとー、えー等)が多く見受けられた。キーワードとなる接統詞に関しては、レジメ有の発表形式談話で順接の接統詞とされる「それで」「だから」が共に1回、インタビュー形式談話においても順接の接統詞とされる「で」「だから」が共に1回で、談話標識となる文頭、文末における逆接の接統詞は見受けられなかった。ただし、資料2において文中で逆説の接統助詞である「けど」「が」それぞれ1回見受けられたが、談話全体の展開において、特に影響を与える類のものではなかった。以上の点から、話者Bの談話も話者A同様、順接の接統詞を用いて話題を累加する「客観説明累加型」である可能性が示唆された。また、評価に関しては資料2の文字資料(レジメ)に多く見られたが、省略ができないものが多いことから、話の流れに乗せて付け加えられていることが分かり、従ってここからも「客観型」であることが窺えた。

資料2(文字資料:レポート)

1.はじめまして。oooと申します。2.私はプサンから来ました。それで通学はできないので今寮で生活しています。3.寮は4人で生活しているのでちょっと不便などころもあるけど、まあ楽しく生活しています。4.私の家族は4人で、両親と弟が1人います。両親は私一人にチョンアンにいてすごく心配してくれます。5.とてもありがたいです。また弟は今高校生で私みたいに日本語に興味があるそうです。6.最近の趣味はドラマを見ることです。特にイギリスのドラマを見ています。7.たとえば「Doctor Who」「Skins」「RobinHood」を見ています。8.字幕なしには全然理解できないんですが、少しづつ英語をドラマで習っています。9.また私は映画を見るのも大好きです。一番好きな映画は「ハリポーター」です。10.「ハリポーター」に出るRupert Grintも大好きです。ファンです!!11.で、最近、日本語と英語(イギリスの)ももっと習いたいと思います。12.自己紹介はこれでおしまします。これからどうぞよろしく願います。13.ありがとうございます。

\*レポート通りに入力

資料1(音声資料:発表)

1.おはようございます。2.わたくしの名前はoooと申します。3.わたしは釜山から来ました。4.それで、今学校の寮で住んでいます。5.だから学校に歩いて行きます。6.えっと、私の家族は4人の家族で、親と弟が1人います。7.えっと、私が好きな映画はハリポッターの映画です。その中でロンの役をしたロバート・クリフトが一番好きです。8.えっと、または、えー、今の私の夢はちゃんと勉強して、えー外国語の勉強を一番熱中することです。9.どうぞよろしく願います。

資料3(音声資料:インタビュー)

1.えー、私はoooと申します。2.私は今21歳で、うーん...ナムソウル大学日本語学科2年生、で、2年生です。3.えー、家族は4人で、両親と弟と私です。4.今、家は釜山です、釜山です。5.だから通学が、通学が難しいので、今寮で生活しています。6.以上です。

\*下線部は、キーワードとなる語(フィルター、談話標識(接続詞、接続助詞)等)

## 5.1.2 「4.2 韓国人日本語学習者の談話展開方法分析」

5.1.1 「4.1 予備調査」においては、文字化資料を提示し、分析・考察の結果を示したが、ここでは5.1.1 「4.1 予備調査」で示したような下線部のキーワードを明確に示すことと談話の要素や内容を談話の構造として客観的に分析することを目的とし、分析表による分析によって考察を試みることにした。なお、分析表は話者AAのみ示すこととする。

## 話者AA:自己紹介

話者AAにおいては、文頭・文中・文末におけるキーワードで、談話展開方法においてキーワードとなる語が一つも見受けられなかった。次に要素及び内容を見てみると、資料1、資料2においては要素では紹介が多く、内容では状況説明が多い事から、客観的事実を羅列した箇条書きタイプ談話である事が窺える。また、レジュメ無の資料3では内容は殆んど省略されてしまっているが、内容を見てみるとやはり状況説明がなされている所から、主観的表現の含まれない客観説明累加型を採っていることが窺える。

## 資料2(文字資料)

文番	小テーマ	要素	分類	内容	文頭	文中	文末
1	挨拶	導入1		挨拶	0	0	0
2	名前	導入2		名前紹介	0	0	0
3	現況1	設定2		状況説明付加1	0	0	0
4	現況2	設定2		状況説明付加1'	0	0	0
5	家族について	紹介1		状況説明2	0	0	0
6	住んでいる所1	紹介2		状況説明3	0	0	0
7	住んでいる所2	紹介2'		状況説明付加3'	0	0	0
8	好み(人)	紹介3		好み説明(主観)	0	0	0
9	好み(食べ物)	評価	内	嗜好紹介(主観)	0	0	0
10	挨拶	結語		挨拶	0	0	0

資料1(音声資料)

文番	小テーマ	要素	分類	内容	文頭	文中	文末
1	挨拶+名前	導入		挨拶+名前紹介	0	0	0
2	現況	設定		状況説明1	0	0	0
3	家族について	紹介1		状況説明2	0	0	0
4	住んでいる所1	紹介2		状況説明3	0	0	0
5	住んでいる所2	紹介2'		状況説明付加3'	0	0	0
6	好み(人)	紹介3		好み説明(主観)	0	0	0
7	好み(食べ物)	評価	内	嗜好紹介(主観)	0	0	0
8	挨拶	結語		しめくりの言葉	0	0	0

資料3(音声資料)

文番	小テーマ	要素	分類	内容	文頭	文中	文末
1	挨拶	導入1		挨拶	0	0	0
2	名前	導入2		名前紹介	0	0	0
3	住んでいる所1	設定1		状況説明	0	0	0
4	住んでいる所2	設定1		状況説明付加	0	0	0
5	挨拶	結語		挨拶	0	0	0

話者AB:自己紹介

話者ABの談話においては、「デ」「ソシテ」という順接の接続詞及び順接の接続助詞が談話展開方法のキーワードとして多く用いられている特徴が見受けられた。次に、要素及び内容を見てみると、資料1、資料2の要素においては紹介が多く、内容においても紹介や状況説明が多い事から、客観的事実を羅列した箇条書きタイプ談話であることが窺える。また、レジュメ無の資料3では内容は殆んど省略されてしまっているが、やはり紹介が多い所から、主観的表現の含まれない客観説明累加型を採っていることが窺える。

## 話者AC:自己紹介

話者ACの談話における主なキーワードとしては、順接の接続助詞及び接続詞助詞と考えられる「で」と音声会話資料(資料1、資料3)に見られるフィラーが挙げられる。文字資料(資料2)では、順接の接続詞「で」が1回のみで、その他にはキーワードとなる語は使用されておらず、要素では紹介が、内容では状況説明が羅列されていくという話者AAと似たタイプの談話展開方法である事が窺える。また、フィラーに関してはレジメ有の資料1(音声会話資料)よりも、レジメ無の資料3(音声会話資料)において多く見受けられたが、要素や内容には変化が見受けられなかった事から、話者ACのフィラーに関しては展開方法に影響を与える要素がないことが分かった。また、音声会話資料の資料3においては、話者の気持ちが語られている評価部分が見受けられたが、いずれも話の流れに乗せて付け加えられたもので、主観直情型の特徴を表すものではなかった。従って、話者ACの談話も客観説明を羅列して累加していく客観説明累加型タイプであることが窺えた。

## 話者AD:自己紹介

話者ADの談話は、話者ACの談話同様文字資料(資料2)で順接の接続助詞「で」が1回及び、音声会話資料(資料3)で順接の接続助詞「で」が1回使用されただけで、どの資料もほとんど接続詞を用いずに談話が展開されていることが分かる。また、資料1と資料3においては、いくつかのフィラーが見受けられるが、これらも話者ACの談話におけるフィラーと同様、要素や内容に変化は見受けられない事から、展開方法に影響を与える要素がない事が分かる。要素及び内容に関しても、他の話者同様要素においては紹介が、内容においては状況説明が多い事から、話者ADの談話展開方法も客観的事実を羅列して累加していく客観説明累加型タイプである事が窺えた。

## 話者AE:自己紹介

話者AEの談話は他の話者とは異なり、文字資料(資料2)及び音声会話資料(資料1及び資料3)それぞれの談話において逆説の接続助詞「が」が文中で1回ずつ用いられている。しかしながら展開方法に影響を与えるものではなく、話者AEの談話も他の話者同様接続詞をほとんど用いずに展開していることが窺える。フィラーに関しては、音声資料3の後半部分において多く用いられるという特徴的な特徴を示

している。さらに、要素及び内容を見てみると、要素においては紹介が、内容においては状況説明が多いことが分かる。話し手の気持ちを述べた評価部分においては「話の流れに乗せて付け加える」とされる「物語に内包されたもの」と「話の筋とは関係なくはさんだりする」とされる「物語の枠外で付け加えるもの」の両者が見受けられたが、主観直情型の特徴とされる「物語の枠外で付け加えるもの」は資料1と資料2でそれぞれ1回だけで、総合的に判断すれば客観説明をひたすら累加していく客観説明累加型タイプであることが窺えた。

## 5.2 「4.3 韓国人日本語学習者(大学生)の日本語談話展開方法に対する認識」

### 5.2.1 アンケート結果による分析

表1(2009年度 アンケート結果)

協力者	年齢	出身地	言語形成期	学習歴	日本滞在歴	JLPT	談話型
BA:女	19歳	ソウル	ソウル	4年	—	2級	A+B
BB:女	20歳	ソウル	ソウル	2.5年	広島:4か月	2級	A+B
BC:女	20歳	ソウル	ソウル	4年	—	2級	B
BD:女	23歳	ソウル	ソウル	3年	東京:1週間	—	A
BE:女	19歳	ソウル	ソウル	4年	—	2級	A
BF:女	21歳	ソウル	ソウル	4年	東京:1年間	1級	A+B
BG:男	25歳	ソウル	ソウル	3年	東京:1週間	—	A
BH:女	19歳	ソウル	京畿道	3年	広島:1か月	2級	A
BI:女	20歳	京畿道	ソウル	7年	—	—	A
BJ:女	19歳	京畿道	京畿道	2年	—	3級	B
BK:女	20歳	京畿道	京畿道	3年	広島:2か月	2級	A+B
BL:女	20歳	京畿道	京畿道	3年	—	2級	A+B
BM:女	20歳	ソウル	ソウル<京畿道	3年	広島:2か月	3級	A

BN:女	19歳	京畿道	慶尚北道・慶州	4年	広島:2か月	2級	A
BO:男	22歳	忠清南道	大田<ソウル	2年	川崎:1年間	1級	A+B
BP:女	20歳	全羅北道	全羅北道・井邑	2.5年	広島:1カ月	—	A

表2(2010年度 アンケート結果)

協力者	年齢	出身地	言語形成期	学習歴	日本滞在歴	JLPT	談話型
BQ:男	22歳	ソウル	ソウル	5年	東京:1ヶ月	2級	×
BR:男	27歳	全羅北道	京畿道	5年	東京:1年間	3級	×
BS:男	25歳	ソウル	京畿道	5年	東京:1年間	1級	A
BT:男	23歳	京畿道	京畿道	2年	広島:6ヶ月	—	B
BU:女	22歳	ソウル	ソウル	4年	香川:1ヶ月	2級	A+B
BV:女	21歳	忠清南道	光州/江原道/ 大田/全州	5年	大阪:2泊	3級	A
BW:女	22歳	京畿道	京畿道	4年	東京:4泊	2級	A
BX:女	21歳	京畿道	京畿道	3年	—	3級	A
BY:女	21歳	江原道	京畿道	4年	大阪:4泊	—	B
BZ:女	23歳	京畿道	京畿道	4年	東京大阪等	2級	B
CA:女	25歳	ソウル	ソウル	5年	東京:1年半	2級	A+B
CB:男	28歳	ソウル	京畿道	4年	東京:1年間	1級	A
CC:男	25歳	ソウル	ソウル	2年	横浜:2年間	2級	B
CD:男	23歳	ソウル	ソウル	1年	東京:5泊	2級	B
CE:男	22歳	釜山	釜山	2年	福岡:1週間	—	A

※談話型の「×」は、「A,Bどちらでもない」を回答

### 5.2.2 考察(アンケート結果から読み取れること)

2009年度のアンケートの結果は、どちらかといえばAという回答を選んだ者が8名、Bが2名、A+Bは6名という結果になった。1番多かったAを選んだ回答者の自由記述回答は、擬音語、擬態語など余計な表現はあまり入れない、Aの方が馴染みがある、教科書で習った話し方、日本語があまり上手じゃないためなどで、1番少なかったBを選んだ回答者の回答は、感情表現が分かりやすく自分もよく使う、日本語が下手なため擬音語などをよく使うなどであった。次に多かったA+Bを選んだ回答者の回答では、状況によって使い分けるという回答が多く、使い分ける状況については、Aが年上の人と話す場合、Bは友達と話す場合、Aは授業などでよく使う、Bはドラマなどでよく耳にする、普段はAだが、興奮するとBになるであった。

また2010年度アンケートの結果では、どちらかといえばAという回答を選んだ者が6名、Bが5名、A+Bは2名、どちらでもないが2名という結果になった。1番多かったAを選んだ回答者の自由記述回答は、擬音語、擬態語などの表現はあまり使わない、日本語ならAで韓国語ならB、Bは若い人や女性のような印象などで、次に多かったBを選んだ回答者の回答は、感情表現をよく使う、ドラマで勉強しているためなどであった。A+Bを選んだ回答者2名の回答は、会話はAだけどメールなどはB、状況によって使い分けるであった。また、どちらでもないと回答した2名の理由は、A、Bともに女性の話し方のような印象を受けたため(回答者は男子学生)、日本語が下手だから分からないというものであった。

以上の結果から、2009年度及び2010年度ともにAの客観説明累加型を使う話者が多く、その理由として、Aの客観説明累加型は日本語のテキストで多く用いられている可能性があり、学習段階にある学習者にとってはAの客観説明累加型の方が学習しやすいのではないかということを指摘することができる。また2009年度の調査では、Bの主観直情型はドラマなどで耳にすることはあるとしても、実際の使用には至っていないことが窺えたが、2010年度の調査ではBも多かったことから、主観直情型はドラマなどで耳にする機会がありメディアの発達によって最近の若者はBの話し方も意識し、実際に使い始めているのではないかということが窺えた。また、A+Bに関しては、2009年度及び2010年度ともにAとBを状況によって使い分けているとした学習者がおり、興味深い結果を得ることができた。

## 5.3 「4.4 韓国人日本語学習者(大学生)の談話展開方法分析(個人的経験物語)」

## 5.3.1 分析及び考察

分析は分析表を用いて行うが、ここでは分析表は省略することとし、必要に応じて文字資料を示すこととした。ただし、参考のために話者1のみ文字資料及び分析表の両方を示すこととする。

話者1:KY 「高校の時の話」

話者1の談話は、全体的には客観的な状況説明が主観的な表現よりもやや多く、評価もそのほとんどが物語に内包されたものであるところから、一見客観的に物語を展開した客観説明累加型のように思われるが、所感も多いことから客観説明累加型基準の混合型に類型することができると考える。また、接続詞をほとんど用いずに展開する方法は、日本語学習者に見られる特徴であると考えられる。その他の特徴としては、フィラー(言い淀み等)が多く、フィラーが談話標識の役割をしている個所も見受けられる。

1. コーコーノ ハナシノ ア コーコーノ ハナシダケド キーテネ 2. ナカナカ オモシロイヨ 3. ア シショー シガンニ ワタシノヨコノセキニ トモダチガネテイタンダ 4. オー ソノトキ プットスルオトガシテ ワタシワ ビックリシタヨ 5. コノオトナニ?ト オー コノオトナニ?ト オー オモッテイタンダ 6. ナニカシッテル? 7. トモダチノ オー オナラノオト オトダッタ 8. エンソクデ プップットシテ 9. オー ホントニオモシロカッタヨ 10. オー ベンピカドウカウシラナイケド ズット ズットシタンダ 11. ン ソノトキ トモダチ アー ソノトキトモダチガ アー 12. オーキーオトデ ア デオーキーオトデ プットシテ 13. トモダチガ ジブンガシタ オア ア オナラノオトニ ビックリシテ 14. トモダチガ メオサメタ サ ア サメタヨ 15. ソレモオモシロカッタガ 16. アトノ セリフガ モットオモシロカッタ 17. ワタシ タマゴオウムユメミタ 18. サイコーデシヨ

文No	要素	分類	内容	文頭	文中	文末
1	要旨:何の話か		話題提示	0	ア/ダケド	ネ
2	評価:話し手の気持ち	外	所感	0	0	ヨ
3	設定:いつどこでだれが何をしたか		状況説明	ア	0	ダ
4	出来事:起きた事件		状況説明+所感	オー	テ	ヨ
5	評価:話の意味	内	心状説明	0	オー/オー	ダ
6	評価:(意味)	内	問いかけ	0	0	0
7	結果		状況説明	0	オー	タ
8	設定		状況説明	0	0	テ
9	評価:(気持ち)	外	所感	オー	0	ヨ
10	評価(意味)+設定	内	所感+状況説明	オー	ケド	ダ
11	出来事		状況説明	ン	アー	アー
12	出来事		状況説明	0	ア	テ
13	出来事		状況説明	0	ア	テー
14	出来事		状況説明	0	ア	ヨ
15	評価(気持ち)	内	所感	0	0	ガ
16	評価(気持ち)	内	所感	0	0	タ
17	設定		会話文	0	0	0
18	結語(+評価)	内	しめくり	0	0	デシヨ

## 話者2:KD 「犬の話」

全体的には客観的な状況説明が多いが、主観的な所感も多く、一見客観型と主観型を合わせた混合型のように思われるが、主観的な内容を述べている評価部分の分類が全て物語りに内包されたものであることや、設定や結果と一緒に評価が現れていることを考慮すれば、客観的に物語を展開した客観説明累加型に類型することができる。また接続詞をほとんど用いずに展開する方法やフィラーの頻用は、話者1同様、日本語学習者に見られる特徴であると考えられる。

1.(省略)2.ナマエワ モンキー オ- 3.オ-チャイロノナガイケガ ア(省略)4.オ-ハジメニミタトキワ オ-カーサンニー 5.オ-カーサンナンデスカ(省略)6.オ-コノーナガイケガミニクイカラ オ- 7.オレワ イモートト オ-ケオ(省略)8.(省略)9.(省略) 10.オ- シカシ (省略)11.オ-オレワイモートトフタリデ オ-モンキーオ(省略)12.モンキーワタオレナクテ ズットウゴイテウゴイテ オ-ゼンゼンケーガキラレナカッタダ 13.ケッキョク オ-サンジカン カカッテ オ-ヤット オワッタ 14.オ-オレワホントーニ ハラガタッテ 15.コイツステヨートシタンダガ オ-イモートニジャマサレテ オ-ガマンシタ

## 話者3:KJ 「酔っ払いの話」

全体的には客観的な状況説明が多く、主観的な表現を含む評価は少ない。さらにその評価も4回のうち3回が物語りに内包されたものであるところから、客観的に物語を展開した客観説明累加型に類型することができる。ただし、この話者の特徴として、文末に「ネ・サ・ヨ」を用いているところだと言える。その中でも「ネ」に関しては、聞き手を納得させる為の念押し of 役割を果たしていることが窺え、聞き手を意識した話し方をしているということが出来る。また、話者3においてもフィラーが頻繁に用いられており、この点に関しては、話者1と話者2の特徴と一致する。

1.(省略)2.(省略)ダケドサー 3.(省略)4.(省略)5.(省略)6.シ ソノソノトキサー シ(省略)7.(省略)クヤマレルトオモッタノヨー 8.デ (省略)ソノオジサンオ オコシタノネ 9.(省略)10.(省略)11.アリエナイヨネ 12.(省略)13.ジブンガ センロニオチタコト モワカッテナイミタイダッタヨ 14.シ ヤッパリサケッテ コワイナー トオモッタジケンダッタヨ

話者4:MS 「将来の夢の話」

全体的には主観的な表現を含む評価が多く、客観的な状況説明が少ないところから、主観的に物語を展開した主観直情型に類型することができる。ただし、分類においては物語に内包されたものが多く、枠外で付け加えるものは1回のみであったことから、混合型もしくは客観説明累加型であるの可能性も考えられる。また、他の話者同様、やはりフィラーが多いという特徴が見受けられる。

1. シー ワタシノユメワー センサーニナッテ ガクセータチオ オシエルノヨ  
2.(省略)3.(省略)4.ホカノガクセータチノ タチヨリ オー ヘタダガ 5.ワタシナリ  
ドリヨクオ シテミタイノ 6.オー ソチュギョーノ ア ソチュギョーノ アトニワ  
7.シー クーコーデ アルバイ(ト) ア バイトオシナガラ(省略)8.(省略)9.デエ ソコ  
デ(省略)10.オー(省略)11.オ(省略)12.(省略)13.(省略)ユメナノ

話者5:AJ 「恋人の話」

話者5の談話は、客観的な状況説明と主観的な表現を含む評価がほぼ同数だったところから、客観説明累加型と主観直情型の混合型に類型することができる。と考えるが、所感がやや多かったことを考慮すれば主観直情型基準の混合型ということができる。また、文末に「タ」「ダ」を用いた言い切り型が多く、この特徴は話者1、話者2の特徴と一致する。さらに話者5も他の話者同様、フィラーが多いという特徴が見受けられた。

1.(省略)ハツコイオハジメタンダ 2.(省略)3.(省略)ダイジナヒトダッタ 4.(省略)  
5.(省略)ワカレチャッタ 6.ワ(省略)7.(省略)8.(省略)9.(省略)ウマクデキナカッタ  
ンダ 10.シー カレト シーワカレテモ シー レンラクワズットー トッテタ 11.  
マー トモダチドウシカンジデー エー ン 12.(省略)13.(省略)イエナカッタ  
ンダ 14.(省略)15.(省略)ワタシトマタチュキアワナイトイワレタ 16.ワタシワ スゴク  
ウレシカッタケドー 17.(省略)18.(省略)チュキアイハジメタンダ 19.(省略)20.ア  
マ(タ)アッ ムカシワ ヤサクッテ タクマシカッタノニイマワ ナンダナート  
オモッテ 21.(省略)22.ッ(ト)ヤッパリー (省略) 23.(省略)24.(省略)25.ット ン  
ドーセ ツキアイハジメタカラー 26.(省略)

## 話者6:YJ 「服の話」

全体的には客観的な状況説明が20回/31文と多く、主観的な表現を含む評価もその殆どが物語に内包されたものであるところから、客観説明累加型に類型することができる。

話者6は話すスピードが速く、文番号2や3、5、7、18、20、22、25のような繰り返しの言葉や繰り返しの言い淀み、繰り返しながらの訂正が多く見られる特徴がある。このタイプの言い淀みは他の話者とは異なる特徴であると言える。また接続詞としては、逆説の接続詞とされる「ダケド」が多く用いられているが、必ずしも逆説の用法で用いられてはおらず、談話を展開する際の話者6の特徴と言える。

1.(省略)カッタ<sup>ン</sup>ダケドー (省略)カッタ<sup>ン</sup>ダケドー 2.コノ コノ コノパンダノフク アン タヌキミタイダケドー コノパンダノフク 3.コノカウトキモー コノカウトキンモー 4.モー ウリバデー コレパンダノフクデスヨパンダコレタヌキジャン 5.コレコレコレアッサーパンダ マー(省略)6.(省略)カッタ<sup>ン</sup>ダケドー 7.マミルヒト ミルヒト ミルヒトヒトツカラ ヒトヒトカラ 8.(省略)9.(省略)10.(省略)11.(省略)12.マー (省略)カワイーダケドー マ 13.(省略)14.(省略) 15.(省略)16.アー コン コノ(省略)アルイタンダケド 17.(省略)18.ワー タヌキジャーン タヌキダ タヌキダ タヌキダ 19.(省略)20.マー ボートシテイルンダカ ボートシテタンダケドー 21.(省略)22.コロッコロッ ナニコロ(ス)(省略)23.(省略)24.(省略)25.コレカラワ コノフク イエデ イエダケデ イエ イエニダケデ キョートオモッタンダケドー 26.(省略) タノ タノシミニシテイタノニー 27.(省略)28.(省略)キタンダケドー 29.(省略)30.アー ツライ 31.コレキテ イエニカエルトキ ドーシヨー

## 話者7:HU 「悩みの話」

話者7の談話は、客観的な状況説明が主観的な表現よりもやや多く、主観的な会話を外枠として付け加えるのではなく、状況説明のところどころに内包して話しているところからも、客観説明累加型基準の混合型に類型することができると思われる。

また話者7の特徴としては、「デモ」「ダケド」といった逆説の接続詞を用いて談話を展開している点及び、文末に「ノ」を用いている点である。接続詞に関して言えば

話者6同様、逆説の接続詞であっても必ずしも逆説の用法として使っているとは限らない点である。これらの用法は日本語母語話者であっても用いることもある為、日本語非母語話者の特徴とすることはできないものであるが、展開方法としては特徴とすることができると考える。文末に「ノ」に関しては、文脈から、話し手を意識したものではなく話者自身の強い願望が現れたものと考えられることができる。

1.(省略)サイキン ナヤムコトガアルンダケド キイテ クレナイカ 2.(省略)トモダチトイッテタンダケド 3.モーイッカイ ニホンニイキタイノ 4.デモ オカネモアンマリナイシー(省略)5.デ ソレデーカンガエダシダシタノガー コウカンリユーガクセーナノ 6.デモ マソレモ カネガナイカラー マドーシヨーカナデーモ ダシー 7.(省略)8.マデモ ヤッパ オカネガモンダイナンダ 9.(省略)10.(省略)11.(省略) 12.(省略)13.(省略)14.シー デー デモ ソレヤッパキビシーワネ 15.ダカライマ ドーシヨーカナッテ(省略)カンガエテンノ 16.(省略)

話者8:KJ 「マルチルームの話」

話者8の談話は、客観的な状況説明と主観的な表現がほぼ同数だったところから客観説明累加型と主観直情型の混合型に類型することができるが、評価のほとんどが物語に内包されたもので省略できないことから客観説明累加型基準の混合型とすることができる。

また話者8に関しては、文頭に「アー」というフィラーを頻繁に用いることで、談話を展開していることが窺える。文末に逆説の接続詞も用いているが、使用数は少なく、ここでも逆説の用法としてというよりは逆説の接続詞を用いることで、効果的に談話を展開している感じがう窺える。

1.(省略)2.(省略)マルティバンッテユートコロニイッデダンイッテタンダケド 3.(省略)4.アー モトモトニジカンデイチマンゴセンウォンカラ ニマンウォングライナンダケド 5.(省略)6.アー マルチルームニイッタラー(省略)7.コーヒー トースト ン パッ ア ポップコーン?ナドガ タベホーダイダカラー 8.(省略)アンマリタカクワナイダトオモウ 9.アー モ ア カラオケダケデー(省略)10.アー カッカップルノ(省略)11.(省略)12.アー オレガイッタ マルチルームワ(省略)ア チカクダッタカラー 13.(省略)14.アー クーポンノ クーポンニツイテモ オシエテアゲル

## 話者9: MJ 「ドラマの話」

話者9の談話は、客観的な状況説明より主観的な表現がやや多かったところから主観直情型基準の混合型に類型することができる。特徴としては、聞き手に直接話しかけ、聞き手を意識して談話を展開しているところである。また、キーワード以外で話者の気持ちを露わにする表現が多く、この点においても主観直情型の特徴を含んでいるといえる。ただし、他の話者同様「ダケド」を比較的多く用いたり、フィラーを多く用いたりしているところから、他の話者と同様の特徴を見てとれた。

1. アー サイキンミテイルドラマガアルンダケドー 2. シー シ シンデレラオネーサンッテシッテル? 3. シー(省略)4.(省略)トッテモユーメーナヒトダヨ 5. シー(省略)6.(省略)ムチューニナッチャウノ 7. シー(省略)8. シー ソシテ (省略)コイデケースケッテシッテル? 9.(省略)10.(省略)11.(省略)デルンダケドー 12.(省略)ダンダンスキニナッテイクッテユーハナシダヨ 13.(省略)14. シー コンシュー(省略)15. シー マタ コイデケースケガデタ ルーキーズノーエーガオーミルツモリナンダケドー ヨカッタライッショニミナイ? 16.(省略)

## 話者10: IH 「日本旅行の話」

話者10の談話は、全体的に客観的な状況説明が多く、談話を展開する際に用いる接続詞及び接続助詞に関しても順接のものが多いことから、久木田(1990)の客観説明累加型の特徴と一致し、従って客観説明累加型に類型することができる。文番号32や33では話者の感情なども見受けられたが、話の流れに乗せて付け加えられているところから、主観直情型の特徴というよりは、客観説明累加型ととることができる。特徴としては、文末に「テ」を用い、続けて文頭で「デ」を用いて談話を展開しているところである。また、「ダケド」も効果的にところどころで用いていることが分かる。さらにフィラーの一つと考えることができる「ナンカ」を42文中27文(1文に複数使用も有)と頻繁に用いている。これは、他の話者にはあまり見られない特徴であった。

1.(省略)キノハナシスルンダケドー (2~8省略)9. ナンカ スゴクビックリシテートモダチニ ナンカ (省略)(10省略)11. ッテ イーナガラ ナンカ イッショーケンメ

イ ナンカ (省略)(12~14省略)15.デ ドーシヨー デモッテ ナンカ バスノヨヤク  
 ヒョーニ ナンカ (省略)(16~31省略)32.デ ワタシワ ナンカ ソコデ カッターシテ  
ナンカ スゴクオコッタ オコッタリ 33.ナンカ イカッタリ ナンカ カナシンダ  
リシタンダケド (34~35省略)36.ナンカ スゴク ナンカ(省略)ダッタカモシレナ  
イケド 37.ナンカ(省略)スゴクキレーデー ナンカ マー(省略)(38~42省略)

### 5.3.2 結果

#### 「4.4 韓国人日本語学習者(大学生)の談話展開方法分析(個人的経験物語)」

分析・考察の結果、客観説明累加型に類型できたものが4名、主観直情型が1名、客観説明累加型基準の混合型が3名、主観直情型基準の混合型が2名であった。内、本人の認識と分析結果が一致したものは3名のみであった。

#### 結果一覧

No.	協力者(話者)	談話展開方法	本人認識	選択理由(本人認識)
1	K・Y	客観説明累加型基準の混合型	B	気持ちをよく話す
2	K・D	客観説明累加型	A	簡潔で男らしい話し方
3	K・J	客観説明累加型	A	原因と結果を簡潔に話す
4	M・S	主観直情型	A	じっくりと話す
5	A・J	主観直情型基準の混合型	A	愛想がない話し方
6	Y・J	客観説明累加型	×	Aに近い、大人っぽく
7	H・U	客観説明累加型基準の混合型	A	Bは女性っぽくうるさい
8	K・J	客観説明累加型基準の混合型	×	AB共に女性っぽい
9	M・J	主観直情型基準の混合型	AB	普段A、メール等B
10	I・H	客観説明累加型	B	自分のことを長く話す

\*本人認識:A=客観説明累加型、B=主観直情型、AB=混合型、×=どちらにもあてはまらない

## 6. 結果

### 6.1 項目ごとの結果

#### 6.1.1 「4.1 予備調査(談話展開方法分析とフォローアップ・アンケート)」

話者Aと話者Bの談話展開方法は、いずれも「客観説明累加型」に類型することができたが、レジユメの有無に係わらず「話されたもの」とされる談話においてはフィラーが増えることが明らかになった。また話者Bに関しては、レジユメの分量に比べ実際に話した場合は内容が少なくなっていくことが明らかになった。(レジユメ(文数13)→レジユメ有・発表形式(文数9)→レジユメ無・インタビュー形式(文数6))

話者Aに関しては日本滞在歴があるが、両者共に目標言語学習中期であり、限られた語彙の中から簡潔に話すことを心がけていることが窺えた。しかしながら、日本滞在歴のある話者Aは話者Bに比べ日本語を話すことに多少慣れていることが、話者Bがレジユメの分量に比べ実際に話した場合は内容が少なくなっていたことに対し、話者Aの談話においてはほぼ分量が変わらないことから窺うことができた。

また、参考としてフォローアップ・アンケートを実施した。アンケートの内容は2種類のモデル談話(客観説明累加型/主観直情型)を用意し、どちらかといえばどちらかが日本語を話す時の自分の話し方に近いかを答えてもらう形式を採った。その結果、両者共に「客観説明累加型」モデル談話を選択、理由として話者Aにおいては「なるべく短いことばで相手の話に応じて次の主題にうまくつなげるようにする」とし、話者Bにおいては「言葉をよく知らないので、自分が話すことができる言葉だけを使うから」としている。

#### 6.1.2 「4.2 韓国人日本語学習者(大学生)の談話展開方法分析」

韓国人日本語学習者(大学生)の談話は、レジユメ無の談話において、内容が比較的短くなる傾向が顕れた。さらに、フィラーを多用する例も見受けられた。また文字資料であっても接続詞が用いられた例は少なく、殆どの談話が箇条書き方式に

会話が羅列されただけであることが窺えた。これは文字資料だけの**特徴**ではなく、音声会話資料でも同じような**特徴**が見受けられた。ここから、**学習歴**が短い日本語学習者は談話を展開すると言うよりも、一文一文を累加して談話を作成しているのではないかと考えることができる。これは、「4.1」のフォローアップアンケートで述べられた回答と一致するものであると考える。

また要素や内容に**関**しては、いずれの話者においても**客観的事実**が述べられた文が多く、ここから久木田(1990)が明らかにした展開方法に類型化するなら、**客観説明累加型**と言うことができる。しかしながら、久木田(1990)が指摘した順接の接続詞はほとんど使用されていない事や地域性等の**特徴**はなく、日本語学習者**独特**の展開方法であることを指摘することができる。ここから、これらの結果は日本語学習者の談話展開方法が地域差ではなく「滞在年数と目標言語習得レベルによってパターンに違いが現れる」とした田中(2005)の結果とも一致するものであった。

#### 6.1.3 「4.3 韓国人日本語学習者(大学生)の日本語談話展開方法に**対**する認識」

2009年度のアンケートから、**学習歴**が2年から4年(7年が1名)の韓国人日本語学習者は、どちらかと言えば**客観説明累加型**を用いると回答した者が**半数**という結果になり、**従**って**学習段階初期~中期**にかけては、**客観説明累加型**による指導をすることが好ましいということが指摘できる。

また2010年度のアンケートからは、**学習歴**が2年から5年(1年が1名)の韓国人日本語学習者は、どちらかと言えば**客観説明累加型**を用いると回答した者とどちらかといえば**主観直情型**と回答した者の**人数**にほぼ差がないという結果となり、2009年度のアンケート結果と多少の違いが現れた。ここから**学習段階中期~後期(中~上級)**にかけては、**客観説明累加型**による指導をすると同時に**主観直情型**による指導も取り入れることが必要であることが指摘できる。回答にもあったように、メディアの**発達**によりドラマなどで**学習する学習者**も今後は**増えて**行くことが予想されるため、中~上級では**主観直情型**も状況や場面によって指導していく必要性が感じられた。

#### 6.1.4 「4.4 韓国人日本語学習者(大学生)の談話展開方法分析(個人的**経験**物語)」

分析・考察の結果、**客観説明累加型**に類型できたものが4名、**主観直情型**が1名、**客観説明累加型基準の混合型**が3名、**主観直情型基準の混合型**が2名であった。**内**、本人の認識と分析結果が一致したものは3名のみであった。**従**来の研究においては**学習者**

の話す日本語談話は客観説明累加型に類型できたが、本稿「4.3」で様々な型の可能性が指摘されたように、「4.4」においても談話展開方法の全てのパターンが見て取れた。

ただし展開方法の特徴としては、学習者の特徴と思われる「接続詞等はほとんど用いずに一文一文を羅列し談話を作成する」という方法が多く採られており、「4.2」を裏付ける結果が得られた。しかしながら、話者5、6、8、9、10では文中及び文末で接続詞等が多く使われており、特に話者10に関しては、久木田(1990)で明らかにされた「関西型」の談話展開方法の特徴と一致するものであり、興味深い結果を得ることができた。

## 7. おわりに

今回の分析及び調査は統計的に行ったものではなかったため、根拠をもって傾向を読み取ることはできなかったが、今後の研究及び談話展開方法を日本語教育へ導入するための予備的研究として興味深い結果を得ることができ、談話展開方法を日本語教育へ導入するに向けて大きく前進したと考える。具体的には「4.1」と「4.2」において分析対象であった韓国人日本語学習者の談話展開方法が客観説明累加型のみであったのに対し、「4.3」のアンケート調査では、主観直情型も示され、その多くは状況によって使い分けるといえるものであることが分かったこと、また「4.4」においては全ての談話展開方法型(客観説明累加型、主観直情型、客観説明累加型基準の混合型、主観直情型基準の混合型)が見受けられたこと、さらに一部ではあるが、分析者の分析結果と話者の認識が一致したこと、「関西型」と非常に類似した談話展開方法が見受けられたことなどが挙げられる。

ここから、今後日本語教育に談話展開方法を導入する場合、客観説明累加型及び主観直情型の両展開方法を取り入れていく必要性が指摘でき、同時に導入の時期や方法を考えていく必要性が感じられた。従って、今後の課題としては日本語学習者の話す日本語談話の展開方法が母語(ないし、母国語)の影響を受けたものなのかあるいは学習言語である日本語の特徴として学習したものなのかということも明らかにし、談話展開方法を日本語教育に導入する際、その導入時期や方法について具体的に考えていくことが望まれる。

なお本稿は、田中香織(2008)田中香織(2009)田中香織(2010a)田中香織(2010b)田中香織(2010c)に加筆・修正したものである。

## 【参考文献】

- 荒則子(2003)「方言談話における計量国語学的類型論」『日本言語学会 第127回大会予稿集』
- 李麗燕(2000)「日本語母語話者の雑談における「物語」の研究 会話管理の観点から」31-32 くろしお出版
- 久木田 恵(1990)「東京方言の談話展開の方法」『国語学』 162
- 齋藤孝滋編(1999)『地域言語調査研究法』『おうふう』
- 齋藤孝滋編(2005)『現代女子大学生における談話の文法』 ティーティーピー出版
- 晋萍(2002)「中国における日本語学習用の談話教材作成の試み」『フェリス女学院大学 日文学院紀要 第九号』フェリス女学院大学大学院
- 泉子・K・メイナード(1993)『会話分析』くろしお出版
- 泉子・K・メイナード(1997)『談話分析の可能性』34-44 くろしお出版
- 田中香織(2004)「同一人物における談話展開の方法のバリエーション—内容差についての一考察—」『言語と人間』 第六号・第七号
- 田中香織(2005)「日本語非母語話者の自然談話による言語コミュニケーションの方法の一考察」『日文学院紀要 第12号』フェリス女学院大学大学院
- 田中香織(2006)「日本語非母語話者の日本語談話から見る日本語教育の問題点と課題」『フェリス女学院大学日本語教育学論究』フェリス女学院大学 日本語教育運営委員会
- 田中香織(2008)「韓国人日本語学習者における日本語談話の特徴—談話展開方法を中心に—」『韓国日本学連合会 第6回 国際学術発表大会 Proceedings』
- 田中香織(2009)「日本語専攻韓国人女子大学生における日本語談話の特徴」『韓国日本語学会 2009年度 春季大会 Proceedings』
- 田中香織(2010a)「韓国人日本語学習者が話す日本語談話の印象に関するアンケート報告」韓国日本語学会 『韓国日本語学会 2010年度 春季学術発表大会Proceedings』
- 田中香織(2010b)「談話展開方法の日本語教育導入に向けての展望」韓国日本文化学会 『韓国日本文化学会 第36回 国際学術大会Proceedings』
- 田中香織(2010c)「韓国人大学生における日本語談話の展開方法—個人的経験物語を中心として—」『韓国日本学連合会 第8回 国際学術発表大会 Proceedings』

## 要 旨

自然談話を資料とした研究は、エスノメソドロロジーに依って発展してきた。エスノメソドロジストは、膨大な言語データから人々の日常的な会話を分析し一見無秩序であるように思われる日常会話の中にも構造があることを明らかにした。近年、談話に関する研究は社会言語学を始めとする様々な研究分野で盛んに行われつつあり、日本語教育分野においても注目されているが、研究結果が実用的に反映されている例は少ないようである。

本稿の目的としては、韓国人日本語学習者の自然談話を分析することにより、その特徴を明らかにするとともに、学習者本人の学習言語である日本語に対する認識なども明らかにしていくこととにある。さらにその結果から、談話展開方法を日本語教育へ導入するための可能性について示していくこととする。

従来の研究においては学習者の話す日本語談話は客観説明累加型に類型できたが、本稿では学習者の話す日本語談話にも全てのパターンが見て取れた。ただし展開方法としては、学習者の特徴と思われる「接続詞等はほとんど用いずに一文一文を羅列し談話を作成する」という方法が多く採られていることが明らかになった。ここから、今後日本語教育に談話展開方法を導入する場合、客観説明累加型及び主観直情型の両展開方法を取り入れていく必要性が指摘でき、同時に導入の時期や方法を考えていく必要性が感じられた。

今回の分析及び調査は統計的に行ったものではなかったため、根拠をもって傾向を読み取ることはできなかったが、今後の研究及び談話展開方法を日本語教育へ導入するための予備的な研究として興味深い結果を得ることができ、談話展開方法を日本語教育へ導入するに向けて大きく前進したと考える。

キーワード：談話展開方法、客観説明累加型、主観直情型、客観説明累加型基準混合型、主観直情型基準混合型、日本語学習歴、日本語学習者の認識

투 고 : 2010. 2. 28

1차 심사 : 2011. 3. 19

2차 심사 : 2011. 4. 2